

所報

いわみざわ

第178号

岩見沢市立教育研究所

令和7年12月15日発行

Iwamizawa education Laboratory



教育研究所 所報「いわみざわ」第178号をお届けします。

前回に引き続き、「道徳教育」研究部会・「情報教育」研究部会・「ピア・サポート」研究特別部会の記事等を掲載します。

「道徳科」研究部会の中間報告 部長 山崎慶子

テーマ：郷土に愛着と誇りを持ち、自立した人間として他者と共にようなく生きようとする基盤となる授業づくりと子どもの育成

「子どもが煌めく」教育の実現に向けて「ふるさとを愛し、地域社会に貢献できる子」の育成を目指し、今年度から新たなテーマを設定しました。

1 テーマを具現化する研究の視点

- 視点1 ふるさとのよさを実感し、そこで暮らし、成長しているという思いを抱かせる教材の開発と教科等との関連
- 視点2 多様な感じ方や考え方方に触れ、葛藤や共感・共有等を通して自己を確立できる指導の工夫改善
- 視点3 子どもの変容を見取る評価の在り方

(1) 視点1について

ふるさとのよさを実感できるよう、地域の素材を活用した教材開発を進めています。公開研究会では、岩見沢にゆかりのあるグラフィックデザイナー栗谷川健一氏を題材にします。岩見沢小学校の校舎には、栗谷川氏の版画作品が各教室の前に展示されています。岐阜聖徳学園大学教授 山田貞二氏の助言を得ながら、地域の人の願いや思いと子どもたちを繋ぐ教材開発の工夫を重ねています。

(2) 視点2について

多様な感じ方や考え方方に触れる葛藤や共感を通して多くの対話を重ねながら他者理解を深め、自分の考えを形成する授業展開を目指しています。

(3) 視点3について

道徳性に関わる成長の様子の把握に焦点を当て、一面的な見方から多面的な見方へと広がり、自己の生き方についての考え方を深められるようになったなど、子どもの変容を見取る評価の在り方の検討を進めています。

2 研究実践の具体

(1) 中学校にて「読み物教材」を使った授業

7月9日、東光中学校第2学年（指導者 山崎）において、「祭りの夜」（東京書籍）を題材に研究授業を実施しました。生徒の主体的な学びを育むよう個別協議・グループ協議を重視した参加・対話型の展開を図り、授業終末には岩見沢市のPR動画を視聴して自分事にしてまとめるという授業内容としました。課題としては、岩見沢固有の体験や祭りの教材化が挙げられました。

同日、苫小牧市教育委員会参事 東峰秀樹氏をお招きし、1年生の教材「地域の宝」（光村図書）を用いた示範授業も公開しました。授業では、生徒の岩見沢に対する思いに触れながら、地域との関わり方を考える授業が展開されました。資料の中の伝統や文化につながるキーワードに着目し、生徒が地域のためにできることを考えました。地域の宝を人々に伝えたり、地域の人々に思いを馳せて行動に移したりすることの大切さに気づくとともに、生徒から発言を引き出し、生徒の笑顔があふれる授業となりました。



その後の講演では、「教師の意図を明確にした授業構想がよい授業づくりの基礎であり、教師の指導観が大切である」と東峰氏からご示唆をいただき、郷土愛を育む道徳の授業の在り方について学びました。

(2) 小学校にて「地域の素材を教材化した」授業

9月10日（水）に東小学校にて齊藤久子教諭による研究授業を行いました。校舎前の通学路にある屋根付きの「なかよし橋」を題材にした3年生の授業で、橋の建設に関わった当時のPTA会長の思いを動画で紹介し、地域の人々の、児童の安全を願った思いに焦点を当てました。児童は、身近な教材に強い関心を示し、より主体的に授業に参加しました。また、登下校で利用する橋に、これまで以上の愛着と誇りを持つ様子が見られました。地域にある題材を教材として取り上げる有効性を示すモデル授業となりました。



12月9日（火）には岩見沢小学校にて栗谷川健一氏を題材とした6年生の公開研究授業を行う予定です。札幌市在住のお孫さんの動画を取り入れ、ふるさとへの思いやよさ、自己との関わりについて考える授業を構想しています。

また、岐阜聖徳学園大学教授 山田貞二氏に示範授業及び講演をお願いしています。これらの教材開発と実践を通して、検証を進めていきます。

「情報教育」研究部会の中間報告 部長 平尾 陸

テーマ：ICT の積極的な活用を通して

情報活用能力の伸長を図る授業の推進

1 テーマを具現化する研究の視点

視点1 ICT 活用による児童生徒の情報活用能力の育成（授業改善）

視点2 生成 AI 等を活用した学習活動の在り方

（1）視点1について

GIGA スクール構想による端末配備からフェーズが進み、セカンド GIGA に向けて ICT を「使うこと」から「どう学び深めるか」への転換が求められています。本研究では、ICT を単なる提示機器としてではなく、児童生徒が思考を広げ、深めるための「文房具」として日常的に使いこなす姿を目指しました。

授業においては、子どもたちが学習の目的に応じて、タブレット端末やクラウド上のツールを主体的に選択・活用する場面を設定し、情報活用能力の育成を図る授業改善に取り組んでいます。

（2）視点2について

急速に普及する生成 AI については、学校教育における「新たな視点」として位置づけ、昨年度からその効果的な活用方法の検証を行っています。単に答えを求めるのではなく、個別の学習支援を行う「パートナー」として、あるいは思考を搖さぶり、本質的な問い合わせ導く「壁打ち相手」としての活用について探究しています。発達段階に応じたルール作りや、教師による意図的なプロンプト（指示）の工夫を通して、安全かつ創造的な学びの在り方を提案していくこととしています。

2 研究実践の具体

（1）「ICT 活用に関わる研修講座」の実施

今年度は「ICT 活用に関する研修講座I」を実施し、Google Site を用いた校務支援や Canva を活用した授業実践について実技研修を行いました。研修後のアンケートでは、「新たなツールの機能や活用法を知り、大変勉強になった」「授業での活用に極めて高い関心を持てた」など肯定的な意見が多く寄せられました。

られたところです。

一方で、実習時間の拡充やレベル別の研修を望む声もあり、1月9日には緑中でこれらの声を踏まえた今年度2回目のICT研修講座を予定しています。

（2）ICT を活用した公開研究授業の実施（研究指定校）

11月10日に「情報教育」研究部会の研究指定校である第二小学校・上幌向中学校で公開研究会を実施しました。今回は ICT を活用して子どもたちがより主体的に学びながら、「情報活用能力」の伸長を図る授業を公開しました。

① 【主体的に ICT】を活用する姿

第二小学校の社会科（4年・5年）では、子どもたちが学習問題に対し、教科書・デジタル副読本・インターネットなどから、自分に必要な情報源を自ら選択する姿が見られました。集めた情報は「ロイロノート」やノート等に整理・分析され、可視化された考えをもとに活発に対話が行われました。



ICT を文房具のように自在に使いこなし、情報を集め・整理し・発信するプロセスを通して、確かな情報活用能力が育まれている様子が公開されました。

② 【生成 AI】を活用する姿

上幌向中学校の英語科（1年）及び第二小学校の社会科（5年）では、生成 AI を授業に取り入れた実践が公開されました。英語科では、AI で生成した架空の人物を相手に英語でインタビューを行うなど、言語活動の必然性と幅を広げる活用が見られました。



また、社会科では、児童用生成 AI を用いて調べきれない情報を補い、考察をより深める活用がされました。AI を「思考を深めるための手段」として位置づけた新たな授業提案となりました。

テーマ：他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子どもの育成
～岩見沢型ピア・サポートの実践を通して～

1 テーマを具現化する研究の視点

視点1 岩見沢型ピア・サポートに関する資料の整理及び実践収集・情報提供

視点2 岩見沢型ピア・サポート実践の指導

視点3 岩見沢型ピア・サポートの教育的效果についての研究

本部会では、岩見沢市において昨年度から3年計画で推進されている「岩見沢型ピア・サポート研修」での学びを、各校での実践につなげていくことを目的として、上記の視点を基に活動をしています。

今年度は、5月に各校のピア・サポート担当者を対象に行ったアンケートの結果を踏まえ、特に希望が多かった「実践資料のデータ共有」と、「研修内容の還流」を行っています。

2 研究実践の具体

(1) 視点1について

これまで特定の学校がロイロノートの資料箱を活用して実践資料を提供していましたが、部会の立ち上げに伴い、部員7名の所属校で取り組んだ際の実践資料・研修資料を提供しています。

参照先： ロイロノート→北海道岩見沢市「先生のみ」→研究所ピア部会

また、様々なファイル形式に対応することができるよう、特設サイトを立ち上げました。サイトは、岩見沢市で勤務する教職員のGoogleアカウントからのみ閲覧・ダウンロードすることができます。

参照先：<https://sites.google.com/iwamizawa.ed.jp/iwamizawa-peersupport-mlashare>



どちらにも同じデータが入っていますので、各校の実践にご活用ください。

(2) 視点2について

11月4日(火)に、8月に行われた「第Ⅱ期岩見沢型ピア・サポート研修」で扱われた内容の中から、メディエーション(対立解消)に焦点を当てて理論研修・実践演習を行いました。対立を解消するためには双方の感情を言語化して相互理解を図る必要があり、その方法の一つとしてアルスの法則が紹介され、演習シートに沿って参加者全員がメディエーションを体験しました。

市内から50名ほどの先生方にご参加いただき、事後アンケートには、

- 「夏の研修で学んだときは非常に情報量が多くだったので、今回のように短時間で、内容をしぼって整理できたのがとてもよかったです。」
- 「自分と意見が違っても相手の話を聞くことができる子ども、自分の非を認めて反省できる子どもに育てることが大切だと思った。次の日の朝、トラブルがあり早速実践してみたらうまくいった。」

といった感想が寄せられました。

研修終了後には希望者による座談会を開催し、各校の取組や実践の課題等を共有しました。



実践の成果を出すためには、各校のアセスメントや、理論に基づいた実践が求められます。そのため、各校の実態に応じて内容や方法を工夫する必要がありますが、まずは“やってみること”が大切だと考えています。

部員である私たちも、試行錯誤を繰り返して実践する日々であり、提供している資料も完全なものとは言えませんが、先生方の“やってみよう”を支えるピア・ソポーターでありたいと考えています。先生方の「声」を大切にしながら活動を推進してまいりますので、ご協力できることがあればいつでもご連絡ください。

岩見沢型ピア・サポートは、校内の担当や担任の有無、研修の参加歴に関わらず、市内の全教職員が実践者です。他者を思いやり、仲間と共に歩もうとする子どもの育成を目指して、今後もご協力のほどよろしくお願ひいたします。

研修事業 NEWSLETTER



特別支援教育支援員研修講座
事務職員研修講座
不登校対策研修会
食物アレルギー研修講座

特別支援教育支援員研修講座

6月19日（木）、市内の各学校で、特別な支援を要する児童生徒の学習や学校生活における介助、担任等との連携を通じたきめ細やかな支援のために配置されている29名の特別支援教育支援員を対象とする研修講座を行いました。



この講座の主なねらいは特別支援教育支援員の基本的な役割と心構え、子どもへの対応の仕方等について理解を深め、資質・能力の向上を図ることにあります。

講師は、北海道立特別支援教育センター 肢体不自由・病弱研究室長 大西修 様です。先生には、特別支援教育支援員の現状と役割、障害のある児童生徒の理解、障害のある児童生徒の支援のあり方について、実例や演習を交えつつ指導いただき、支援員の皆さん熱心に学び、多くを学校へ持ち帰っていました。

事務職員研修講座



7月15日（火）、新採用5年目未満あるいは20～30代で参加を希望する事務職員の方を対象に行いました。

講師は北村小学校 上原 耕平 様にお願いし、豊富な職務経験をもとに、事務職員の職務や学校運営への参画、地域とのつながり、教職員との関わり方等について幅広く講義をいただきました。

後半のグループ協議では、ふだん少ない同職種のつながりができることもあり、参加者全員で仕事の悩みや工夫点について交流することができました



北海道スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザーでもある日本医療大学 准教授の丸山正三 様を講師としてお招きし、8月1日（金）に不登校対策研修会を行いました。

講義では、不登校の実態やそれにかかわる課題に基づき、家庭を含めた不登校の要因の理解などについて詳しく解説があり、学校でこれらに対応するに当たってはアセスメントが重要であることから、そのポイントや視点について詳しく指導いただきました。

講義の後には、グループになり、学校・教員として、児童生徒の学びを保障し、支援とその体制づくりのためにどのようにしていくべきか協議を行いました。

食物アレルギー研修講座

食物アレルギーについての知識やアナフィラキシーショックに関する理解を深め、適切に対応できる能力を高めるため、市外から岩見沢市に異動してきた教職員等を対象として、管理薬剤師 櫻田 則幸 様を講師として、8月6日（水）に実施しました。



市立の小・中・義務教育学校・高校から68名の参加があり、講師の方から、食物アレルギーの正しい知識と対処方法についての詳しい説明がありました。

講義のあとは、エピペントレーナーを使った実技や実際の場面を想定した演習なども行われ、エピペンを使用するに至ったときの救急要請の仕方や校内の教職員との連携・役割分担などについて実践的に学ぶことができました。